Association of Disability Sciences, Japan

障害科学研究, 38, 33－44, 2014

資　料

カナダにおける「精神薄弱」者施設入所者のコミュニティ復帰の構想と方策
―1920年代末から1930年代のオンタリオ州立施設を中心に―

下司　優里

本研究の目的は、1920年代末から1930年代のカナダ・オンタリオ州立「精神薄弱」者施設における入所者のコミュニティ復帰構想の経緯と内容を解明することにより、1960年代以降の脱施設化運動を再考するための新たな知見を得ることである。当時の同州では、精神科医等の専門家団体において、「精神薄弱」入所施設の隔離化や生殖防止のための断種法制定に関する議論など、「精神薄弱」者をめぐり様々の主張が存在していた。州立施設長のマギーは、「精神薄弱」脅威論と断種の実施に対して不支持の立場をとり、同州断種法の制定を阻止した人物であった。彼は「精神薄弱」者の施設収容の限界と社会的包括の必要性、さらに入所者が施設外で生活することについて訓練の有効性と経済的効率性を指摘し、後任のホーンとともに、コミュニティ復帰策として①地域生活を意図した施設内教育・訓練、②仮退所制度の導入、③コロニーの設置を行った。

キー・ワード：カナダ　オンタリオ州立オリリア施設　「精神薄弱」　コミュニティ
優生学

Ⅰ．はじめに

1．研究の意義と目的

カナダ・オンタリオ州では、1950年代に結成された知的障害児の親の会（the Ontario Association for Retarded Children，以下OARC）が中心となって、1960年代から脱施設化の取り組みが加速する。そして1970年代前後からは、入所施設の解体と知的障害者の地域コミュニティへの移行が政策的に進められてきた。

先行研究によれば、OARCによる脱施設化の主張の根拠には、第二次世界大戦以前の「精神薄弱」者施設保護収容策への根強い批判があったという（Simmons, 1982; Enns & Neufeldt, 2003）。

しかしながら、実際のオンタリオ州立施設では、必ずしも「精神薄弱」者の総収容、あるいは恒久（終生）保護のみが目的として採用されていたわけではなく、むしろ1920年代末には一部の入所者に対してコミュニティへの復帰を目的とした方策が試行されていたのであった（Shea［1970］144-161; Shea［n.d.］10-11）。このことは、戦後の脱施設化の主張に対する反証を与えうるだけでなく、カナダにおける知的障害者の地域生活移行の初例が20世紀前半にすでにみられていたことを示している。

そこで本研究では、1920年代末から1930年代のカナダ・オンタリオ州において、「精神薄弱」者のコミュニティ復帰策を模索した、州立オリリア「精神薄弱」者施設（the Ontario Hospital for Feeble-minded at Orillia，以下オリリア施設）および同時期の施設長に焦点を当て、なにゆえ

東日本国際大学

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

に同施設において入所者のコミュニティ復帰が指向されたのか、また同施設のコミュニティ復帰策の内容を明らかにすることを目的とする。

本研究でとりあげるオリリア施設は、1876年に国内で初めて開設されてから第二次世界大戦後まで、唯一の州立「精神薄弱」専門施設であり、オンタリオ州のみならずカナダ国内の「精神薄弱」者福祉の展開に先駆的役割を果たしてきた。同施設において1927年に施設長に就任した医師のB.T. マギー（Bernard Thomas McGhie, 1889-1945）、および彼の後任となる同じく医師のS.J.W. ホーン（Sidney James Wood Horne, 1896-1949）は、「精神薄弱」者の施設総収容と施設内自立を掲げた前任者のJ.P. ダウニー（Joseph Patrick Downey, 1865-1926）から施設理念の転換をはかり、1920年代末から1930年代にかけて「精神薄弱」入所者のコミュニティへの復帰策を構想・導入したのであった。

第二次大戦以前のオンタリオ州における「精神薄弱」者施策およびオリリア施設に関する歴史研究は、本国カナダにおいても多くはない。なかでもSimmons（1982）は、精神科医等の専門家や女性による団体の活動を分析し、「精神薄弱」者の施設隔離保護運動と補助学級設置運動の展開について論及している。また、Stephen（1995）およびEnns and Neufeldt（2003）は20世紀前半の精神衛生運動の政策的展開に関する研究のなかで、「精神薄弱」者の施設処遇の実態に言及している。これら先行研究では、20世紀前半の「精神薄弱」問題に触れながら、政府や団体の一次資料に基づいて当時の「精神薄弱」者処遇の実態が示されているものの、あくまで断片的な記述に止まる。

さらに、Shea（1970; n.d.）およびChupik and Wright（2006）はそれぞれ、オリリア施設に焦点を当てた文献および論文を発表している。前者は同施設の開設から1960年代までの通史を、専ら施設長報告と施設職員に対するインタビューという限定的資料を基に、施設編年史としてまとめている。後者の論文は、同施設が「精神薄弱」者隔離収容策をとっていた1910年代から1920年代前半までに研究対象時期を限定している。したがって、本研究で対象とする、1920年代後半から1930年代の同施設における入所者のコミュニティ復帰策の構想と実態に焦点を当て、その時代的背景まで含めて追究された研究はない。

そのため、オンタリオ州立「精神薄弱」者施設における入所者のコミュニティ復帰構想の経緯とその方策を明らかにすることは、同州の脱施設化政策を実体的に検討するうえで不可欠かつ重要でありながら未解明の研究課題であるといえる。

2．研究方法

本研究では、マギーがオリリア施設長に就任する1920年代後半から、同施設における入所者のコミュニティ復帰策が導入される1930年代までを主な研究対象時期とする。

主資料として、オリリア施設年次報告書およびオンタリオ州公文書館所蔵の同施設関係資料に加え、これまで人物研究の観点ではほとんど検討されてこなかった、マギーおよびホーン施設長の著書、論文、書簡を用い、入所者のコミュニティ復帰が構想された経緯と意図、および内容を明らかにする。さらに時代的背景として、カナダ公衆衛生協会（the Canadian Public Health Association, 以下CPHA）、カナダ精神衛生協会（the Canadian National Committee for Mental Hygiene, 以下CNCMH）、およびカナダ優生学協会（Eugenics Society of Canada, 以下ESC）等、同時期に「精神薄弱」に関する調査や主張を行っていた団体の機関誌等資料を用いて、当時の「精神薄弱」に関する議論を整理し、それら議論がオリリア施設における「精神薄弱」者処遇に与えた影響について考察する。

3．用語

本研究は歴史研究であり、当時の語意・概念に立脚して分析を行うため、「精神薄弱」等の歴史的用語を用いる。また、1930年代当時のオンタリオ州議会施設局における分類にしたがい、本研究では総称としての「精神薄弱」（feeble-minded）を、最重度級の「白痴」（idiot）、

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

より軽度の「痴愚」(imbecile)、そして最軽度級の「魯鈍」(moron)として区別して用いる[1](the Hospital Branch, 1935)。

Ⅱ．1920年代から1930年代オンタリオ州における「精神薄弱」者をめぐる議論

カナダにおいて「精神薄弱」者の処遇は、19世紀末以降、精神科医、女性団体、そして教育・福祉・公衆衛生に従事する官吏によって注目されてきた政策的課題であった（細川［2009a］2-3; 細川［2009b］88)。

1918年に結成されたCNCMH[2]が牽引役となって、「精神薄弱」者と精神病者を主な標的とした精神衛生運動が1910年代後半から1930年代にかけて高揚し、アルバータとブリティッシュ・コロンビア両州での断種法制定へとつながった（細川［2008］167-172; Richardson［1989］4-5)。

1920年代から1930年代のオンタリオ州では、CNCMHやESCにより、断種こそが精神病者や「精神薄弱」者を含む「精神欠陥」者の増加を防止し、犯罪、売春、貧困、不道徳といった社会問題を解決する一手段であると強く主張されるようになる。これは、20世紀転換期にアメリカ合衆国の「精神薄弱」専門家間で隆盛する、「精神薄弱」を国家の社会的、経済的、道徳的繁栄にとっての重大な脅威とみなす「精神薄弱」脅威論とまったく同じ主張であった（中村［2001］49-50)。

その一方でCPHAなどでは、「精神薄弱」者の隔離保護と断種支持派の論拠のひとつであった「精神薄弱」の遺伝性について疑問を呈するとともに、訓練の成果としてのコミュニティ生活の可能性についても発言がなされていたのであった。

1930年に発足するESCは、断種こそ「精神薄弱」者の増加を防止し、社会問題を解決する合理的手段であるとし、とりわけオンタリオ州政府に対して西部2州に追随して断種法を制定するよう要請する活動を強固に推進する（Dowbiggin［1997］183; Eugenics Society of Canada, 1935; 細川［2009a］5,7; 細川, 2010b)。

すでに1926年から活動を開始していたESCは、会員数こそ100人を超えることはなかったものの（McLaren［1990］114)、その執行部には複数の専門家や有力者を擁しており、オンタリオ州政府や保健関係者に対する発言は説得力をもっていた。

オンタリオ州ブラントフォードの医務官、W.ハットン（William Hutton）を会長とし、同州キッチナーの実業家、A.R.カウフマン（Alvin Ratz Kaufman)、CNCMHの中心メンバーでもあった精神科医のC.M.ヒンクス（Clarence Meredith Hincks)、カナダの遺伝学界における第一人者のM.T.マックリン（Madge Thurlow Macklin)、トロント精神病院初代院長のC.B.ファーラー（Clarence B. Farrar)、そして判事のD.B.ハークネス（D.B. Harkness）らを中枢として、そのほか医師や社会事業家などの実践家もESCの会員に含まれていた（Dowbiggin［1997］183-184; 細　川［2010b］214-215; McLaren［1990］113-114)。

なかでもカウフマンは、1933年から1938年までトロント避妊クリニック（the Toronto Birth Control Clinic）を、またキッチナーに親情報事務局（the Parents' Information Bureau）を設置して、低所得の人々に安価な避妊具を提供する一方、自身は熱心な断種支持者でもあった（McLaren［1990］114-116; McLaren & McLaren［1997］92-123)。

さらに、アメリカ合衆国でも名声を博していたファーラーの加入は、ESCにとって予想外の幸運であった。彼は「精神薄弱」のほとんどが遺伝によるものであるとみなし、「断種により、多くの州が直面している（「精神薄弱」に起因する―筆者）重大な問題を処理することができる」と考えた（Dowbiggin［1997］185; Farrar［1931］92-94)。彼の断種への支持は、断種こそが社会問題解決の合理的手段であるとし（Dowbiggin［1997］186)、各州政府、とりわけオンタリオ州に対してアルバータ州に追随し断種法を制定するよう要請していたESCと方向

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

性を同じくしていたのである。

1935年2月のESC代表団とオンタリオ州首相、M. ヘプバーン（Mitchell Hepburn）との会見に先立ち、ESCが提出した事前資料のなかには、ESC会員で遺伝学者のマックリンによる、「精神薄弱」者の増加を遺伝学的に裏付けた調査報告書や、前年にイギリスで提出された断種問題検討委員会報告書（Report of the Departmental Committee on Sterilization）も含まれており、同州の断種法制定を促す有力な根拠となると考えられた（細川［2009a］7）。実際、この会見においてオンタリオ州政府はESC代表に対して支持する印象を与えたという（細川［2009a］8; 細川［2010b］220）。

同時期にESC以外にも、断種法制定を支持する立場があった。20世紀初頭にオンタリオ州「精神薄弱」者調査官と補助学級調査官を歴任し、1920年に連邦保健局へと異動した女性医師のH. マクマーチー（Helen MacMurchy, 1862-1953）は、1930年代に社会不適応者の優生断種を支持する論文を発表している（MacMurchy, 1934a; MacMurchy, 1934b）。彼女はカナダの代表的な優生論者であった（Brown［2005］256-259; Dodd［1994］137; Dowbiggin［1997］164ほか）。

このように、アルバータとブリティッシュ・コロンビア両州における断種法の制定、専門家や連邦官吏による断種の支持、ESCによる対政府運動などを受け、1930年代のオンタリオ州では、断種法制定要求運動が隆盛となったのである。

一方で、1920年代には「精神薄弱」を社会的脅威とみなす脅威論に批判的見解を示す者も見られていた（細川［2010b］223-224）。たとえば、CNCMHの会員で作業療法・職業訓練部長でもあったN.L. バーネット（N.L. Burnette）は、1922年にCPHA機関誌へ寄稿した論文のなかで次のように主張している。

すなわち、「精神薄弱」者の管理のうえで最も重要なのは指導監督であるとし、「断種は『冷血的な案』でわれわれの理想には不快なばかりか、他の批判を招く」と述べた（Burnette［1922］74）。バーネットは、総収容政策が財政的に不可能であると考えたうえで、「精神薄弱」者の大多数は「環境が正しければ、おとなしく、無害な、満足した生活を送る可能性をもって」おり、「能力に従って教育され、作業の効率を高められ、正しい生活習慣を獲得するように教えられれば…幸福で有用な生活」を送ることができると考えたのである（Burnette［1922］72）。

もっとも、CNCMHが支持したのは、「精神欠陥」者を過密化が進む施設から解放するための純粋な解決策としての「選択断種」であったから（細川［2010a］103）、過激な優生論者による「強制断種」とは目的を異にしていた。

しかしオンタリオ州では、精神鑑定のために病院へ送られる者が膨大な人数であることを是正するため、1938年に設置された同州の精神衛生法運用検討委員会（Royal Commission on the Operation of the Mental Health Act）が、本人や保護者の承諾を得ての選択的断種を許可する法改正を勧告したことから、同州の断種法制定は確実視されていた（Dowbiggin［1997］187; Simmons［1982］131-133）。

ところが、1930年代後半オンタリオ州政府は、断種を容認する同検討委員会の勧告を受け入れず、州議会で断種法制定の日程まで審議されていたものの、法案は結果的に否決されたのであった（Dowbiggin［1997］187; Simmons［1982］114）。同州では断種法は成立しなかったのである[3)]。

Ⅲ．マギーによる「精神薄弱」脅威論の否定とコミュニティ生活の構想

オンタリオ州における断種法成立の抑止力のひとつとなったのが、1927年から1931年の4年間オリリア施設長を務め、その後1930年代にオンタリオ州保健省施設局高官を歴任する（the Inspector of Prisons and Public Charities［1931］3; the Hospital Branch［1935］5）、医師のマギーなのであった。

1919年に30歳で医学博士号を取得したマ

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

ギーは、1920年から1927年までオンタリオ州ロンドンの連邦精神病院に勤務する傍ら、ウェスタン・オンタリオ大学で精神衛生学の准教授を務めていた。

彼は、施設長就任期間からその後にかけて、「精神薄弱」脅威論とそれに基づく断種の実施に不支持の立場をとったのである。

その理由について彼は、1930年と1936年のCPHAでの講演において次のように言及している。すなわち、「精神薄弱者の大多数は健常の親から生まれている」として、「精神薄弱」の遺伝性を否定し、「精神薄弱者の増加防止策としての断種は効果をもたない」との見解を示したのである（Simmons［1982］125）。

また彼は、「非常に多くのソーシャルワーカーが『…精神薄弱が非行の原因である』と思い込んでいる」ことを批判し、「非行は精神薄弱者と等しく健常者にも起こる」との主張を行っていた（Simmons［1982］125）。

さらに彼は、アメリカ神経学会による研究結果によれば、「精神薄弱」女性が健常女性よりも多産であるという説も否定されることを示した。その研究結果とは、「精神薄弱者が生まれる家族数は、一般人口の平均よりも低く…精神薄弱者がもつ子どもの数は平均よりも大幅に少なく…精神薄弱者は一般に比して出生率は低く、死亡率は高い」ことであった（Simmons［1982］124-125）。

このように、マギーはESCを中心とした断種支持派の拠所であった「精神薄弱」の遺伝性と社会問題の主要因子としての「精神薄弱」脅威論を否定したのである。

マギーのもとで副施設長を務め、その後任として施設長を1931年から20年間務めたホーンもまた、マギーの方針を継ぎ、断種法制定については慎重な態度をとっていた（Simmons［1982］125; Archives of Ontario, RG29-24-1-18）。

ホーンは、アルバータ州優生断種法（1928年）とその実施内容に関心をもち、同州優生学委員会の資料や断種同意書を入手するなど情報収集に努めていた（Archives of Ontario, RG29-24-1-18）。当時オンタリオ州保健省にいたマギーに宛てた1936年3月の書簡の中で彼は、「精神欠陥の防止を促進するために、オンタリオ州において断種法が制定されるべきである」が、一方で、「この問題についてわれわれは、誇張的で急進的な意見を廃して、誠実な観点のもとに率直に話し合うべきであるということを強調してもしすぎることはない」と、慎重な姿勢を見せている（Archives of Ontario, RG29-24-1-18, The Letter Dated March 2, 1936）。

ところで、マギー以前に1910年から1926年に急死するまで施設長を務めていたダウニーは、「精神薄弱」に関してなんらの資格も経歴も有していなかったが、就任後は「精神薄弱」者の施設収容と施設内自立を推奨するとともに、オリリア施設の大規模収容施設化と経済的運営を重視した施設運営を推進したのであった。

ダウニー施設長時代に同施設を訪問したCNCMH会員のM. キイス（Marjorie Keyes）は、「オリリア施設では広い部屋が便器で埋め尽くされており、それらには重度級で何もできない入所者が一日中縛り付けられていた」という衝撃的な報告をし、同施設は「満足というには程遠い」（Hackett［1969］167）と述べられたほど劣悪な環境であった。

ダウニーの死後、新たに施設長となったマギーは、彼の理念を継承せず、一部入所者のコミュニティ生活を模索するようになるのである（Greenland［1963］333; Simmons［1982］121-127）。彼が「精神薄弱」者の施設総収容策を支持しなかった理由のひとつには、「州内には6万人から7万人の精神薄弱者がいるが、そのうち施設に入所しているのは約2,000人、また診断を受けている者は約5,000人にすぎない」ため、彼らの総収容は物理的かつ経済的に不可能であると考えたこともあった（Simmons［1982］124）。

マギーは就任と同時に、CNCMHのメンバーでトロント大学心理学部准教授のE.D.マクフィー（E.D. MacPhee）ら3名の心理学者を任用

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

し、同施設で入所者の研究を開始した（Simmons［1982］121）。その研究結果をまとめた共著書、「低知能者施設（hospital for subnormals）における訓練と研究」では、入所者の障害、病歴、教育・心理特性等の調査内容に加え、1928年より同施設で開始された教育プログラムの構成、対象、内容等が記述されている（McGhie & MacPhee, 1929）。

1929年に発表された同著のなかには、「精神薄弱」者の訓練とコミュニティ生活に対するマギーの肯定的見解を認めることができる。同著において彼は、多くの人々と「精神薄弱」関係者により容認されてきた、施設収容による「精神薄弱」者の社会的排除ではなく、社会への包括の重要性を提唱し、また入所者に「より効果的な訓練法とよりよいケアを提供したならば、…コミュニティで幸福かつ生産的に、また自他に深刻な危険もなく就労することのできる者を増やすことができる」と確信的に述べているのである（McGhie & MacPhee［1929］8-9）。また、彼が「精神欠陥者の最も経済的な処遇方法はコミュニティで世話すること」（McGhie & MacPhee［1929］10）と述べていることから、彼の「精神薄弱」者のコミュニティ復帰の論拠は脅威論への反対だけでなく、経済的有効性にもあったことが窺える。

なお、オンタリオ州保健省施設局副官へ着任以降のマギーは、1930年代にカナダおよび米国の医学と心理学系の雑誌に数件の論文を寄せているが（McGhie, 1937; McGhie, 1939; McGhie, 1941; McGhie & Brink, 1934）、その内容は広く精神疾患および精神病院入院患者を対象としており、「精神薄弱」者のコミュニティ生活についての論及はみられなくなる。

Ⅳ．オリリア施設における地域生活を意図した教育・訓練機能の強化

マギーの理念のもと、1920年代末から1930年代のオリリア施設において実際に採用された、入所者のコミュニティ復帰策はどのようなものであったのだろうか。

オンタリオ州議会に提出されたオリリア施設年報およびマギーの著書の記述から、同施設におけるコミュニティ復帰策の主柱および施行年として以下の3つがあげられる。

① 社会生活を目指した施設内教育および職業訓練（1927年）
② コミュニティへの適応訓練のための仮退所制度（probation）の導入（1928年）
③ 退所への段階的措置としてのコロニー（Colony House）の設置（1939年）

ここでは、それぞれのコミュニティ復帰策の目的、対象と方法を明らかにする。

オリリア施設ではまず、施設の教育事業として、1927年に教育・訓練の内容別に「就学前学級（pre-school）」、「下級学級（lower school）」、「上級学級（upper school）」、そして「職業訓練学級（trade school）」の4段階の学級を設置し、マクフィーの指揮のもと、施設職員によって指導が行われた。

各学校における教育・訓練内容は、基本的にTable 1の通りであり、マギーは必要に応じて修正するとしている（McGhie & MacPhee［1929］20）。

教育事業の対象は施設入所者であり、各学級に何名の「生徒」が配置されていたのかは明らかでないが、各生徒の達成度により、教師の判断で配置や進級が決定されていた[4]（McGhie & MacPhee［1929］20）。とりわけ上級学級以上では、早期教育・訓練の有効性と教育・訓練内容が高度である点から、主に若年の「精神薄弱」児、および「魯鈍」や軽度「痴愚」の者が対象となっており、比較的高い年齢の重度「痴愚」は若干名が含まれていた[5]（McGhie & MacPhee［1929］24-25）。

続いて、1928年に開始された仮退所制度（probation）は、施設の監督のもと入所者が自身の家庭あるいはそのほかの家庭[6]において生活を送るという、退所へ向けた段階的訓練事業であった。マギーは、1928年11月までに「28人の生徒が仮退所し、彼らはコミュニティへの適応に成功しており、また自身で生計を立てて

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Table 1 施設内学校における教育システム

就学前	下級学校	上級学校	職業訓練学校
1．散歩 2．会話 3．排泄の訓練 4．食事の練習 5．着替えの練習 6．他者との遊び	1．感覚訓練 2．筋肉協調 3．幼稚園 4．言語 5．体操	1．計算 2．読みと文学 3．書き 4．作文 5．綴り 6．音楽 7．社会科学 8．自然科学 9．手工訓練 10．家政 11．体操 12．裁縫	男子：塗装と壁紙貼り，ブーツ作り，テーラー，配管業，蒸気官工事業，ボイラー室作業，庭園業，菜園業，搾乳，厩作業，家禽の世話，農業，大工，パン焼き，貯蔵 女子：裁縫，料理，洗濯，保護棟での仕事，メイド，修繕，食卓準備

出典：McGhie & MacPhee [1929] 19.

いる事実から判断するに、学校事業は成功するであろう」と述べ（the Inspector of Prisons and Public Charities [1929] 10)、仮退所事業への満足的評価と施設の教育・訓練事業への期待を示している。

さらに、コミュニティのなかに住居（Colony House）を設け、そこにおいて「精神薄弱」者が小集団で生活を送りながら地域生活への準備を行うコロニー・システムは（Simmons [1982] 127)、1939年に本格的に開始された。8年前の1931年にも同様の試みがなされていたものの、開設から間もなく火事により家屋が焼失していたのである（the Hospital Branch [1932] 19)。

これら仮退所制度およびコロニー・システムという、いわば退所訓練事業の対象者については、その年齢、障害の程度も含め、史料には記述がなく未明である。しかし、仮退所者およびコロニー措置者の性別と人数については、オンタリオ州公文書館所蔵のオリリア施設資料から知ることができる。

Fig. 1は、オリリア施設入所者に占める仮退所者とコロニー措置者の割合の推移を示したものである。

オリリア施設の入所者数は、1920年代後半には1,400人を超え、1940年には2,000人以上となっていた。これに比して仮退所者数は、初年度の1928年度が36人であり、その後年度により増減はあるものの、1940年代前半までほぼ毎年、数名から20名ずつ増加していた。そのため、入所者数に占める仮退所者の割合は約3～6％の間で推移し、大きな変動はみられない。

また1939年のコロニー再開後の最初の3年間は女性のみ8～13人が対象となっていたが、1943年度には男性用コロニーも設置され、1940年代半ば以降は毎年100人前後、すなわち施設入所者のうち約5％がコロニー対象となるなど、同事業は拡大を見せる。したがって、同施設で導入された段階的退所訓練制度・システムは急激な拡大はしなかったものの、一定の成果をあげつつ1940年代まで継続していたといえよう。

V．結論

1920年代から1930年代のオンタリオ州では、「精神薄弱」脅威論に対する支持と懐疑の両方の研究成果や政策が提出されていた。

なかでも1918年に結成されたCNCMHは、1920年前後に実施した全国7州における「精神薄弱」者実態調査の結果を受けて、「精神薄

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

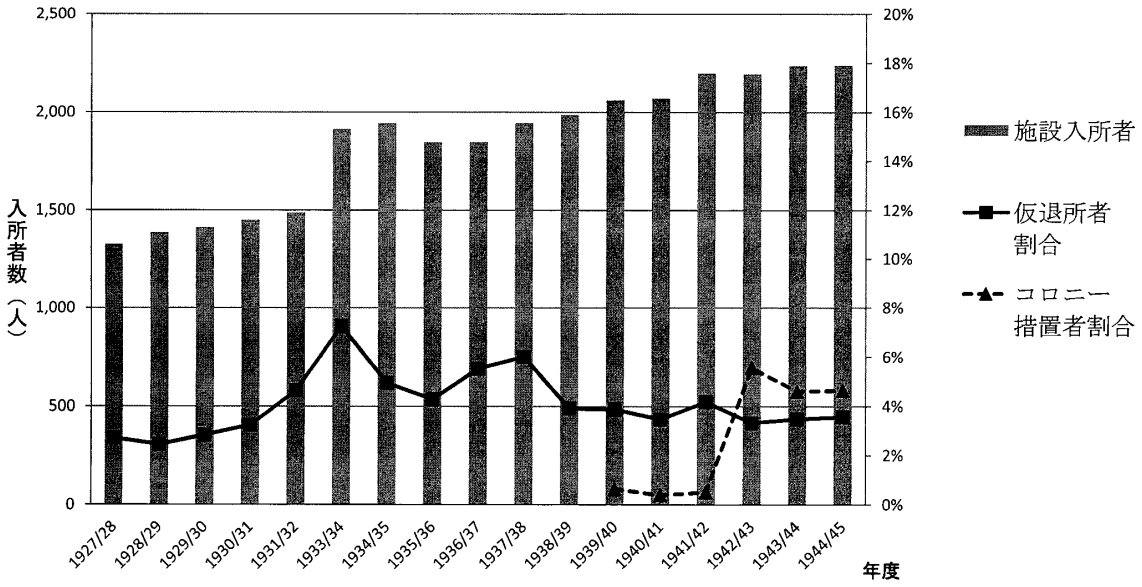

Fig. 1　仮退所者およびコロニー措置者割合の推移

出典：Archives of Ontario, RG29-24-1-4 をもとに筆者作成.

注：パーセンテージ（%）は，入所者に占める割合.

弱」者を含む「精神欠陥」者の増加を防止する一方策として、断種を示唆する。CNCMHは「精神薄弱」を社会問題の最大の根源と捉え、その主たる発生要因は遺伝にあるとみなしていたのである。

アルバータとブリティッシュ・コロンビア両州で断種法が制定されると、1930年に結成されたESCは、内部に資産家、医師、学者といった有力者を擁し、とりわけオンタリオ州政府に対して、西部2州に追随して断種法を成立させるよう積極的な運動を展開した。しかし結局、オンタリオ州で断種法が成立することはなかった。

同州における断種法制定の抑止力となったのは、「精神薄弱」脅威論と断種実施への不支持の立場をとった州立オリリア施設長のマギーであった。彼は、「精神薄弱」者多産説の否定、断種の効用の否定のほか、社会的病理の原因は「精神薄弱」ではなく非行であるとの主張を行い、断種の実施とその根拠となる「精神薄弱」脅威論を否定した。

さらに彼は「精神薄弱」者の施設への隔離総収容の限界と社会的包括の必要性、さらに入所者が施設外で生活することによる経済的効率性とそのための訓練の有効性を根拠として、入所者のコミュニティ復帰を提唱する。

マギーのもと、オリリア施設では主として以下3つのコミュニティ復帰策が導入され、1930年代には後任のホーン施設長へと継承された。まず、施設内における社会生活を意図した教育および職業訓練、次にコミュニティへの適応訓練のための仮退所制度の導入、そしてコミュニティへのコロニーの設置であった。これらの事業は一定の成果をあげつつ1940年代まで継続されることから、マギーおよびホーンによる入所者のコミュニティ復帰策は一応の成功ととらえることができるであろう。

しかしながら、当コミュニティ復帰策の対象は比較的軽度の「魯鈍」児であり、1970年代以降のオンタリオ州における脱施設化政策が目指す、重度の知的障害者までも含めた地域生活移行より、限定的な方策であったといえる。

とはいえ、戦前において施設入所者のコミュニティ移行の取り組みが一定の成果を上げていたこと、その背景には当時の2人の施設長による緻密かつ慎重な処遇方針があったことは、こ

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

れまで隔離収容策への反発が根拠とされてきた戦後カナダ・オンタリオ州の脱施設化運動を、改めて再考するうえでの新たな知見を提供するものである。

註

1）それぞれの知能指数（I.Q.）はおおむね、「白痴」が25未満、「痴愚」が25～50未満、「魯鈍」が50～70であった（the Hospital Branch, 1935）。

2）同協会は、1909年に結成された全米精神衛生協会（the National Committee on Mental Hygiene）に追随する形で発足したものの（Canadian Journal of Mental Hygiene［1919］1）、その前身は1912年に設立された、オンタリオ州「精神薄弱」者ケア協会（the Provincial Association for the Care of the Feebleminded，以下PACFM）であり（Dowbiggin［1997］167; the Feeble-Minded in Ontario［1917］11）、CNCMHの創設者のひとりとなる精神科医のC.K. クラーク（Charles Kirk Clarke，1857-1924）は、PACFMの会長を務めた人物であった。CNCMHは、「精神的要因が主要因子となる、犯罪、売春、貧困、失業といった大儀難問」を解決するという目的のもと（the Canadian Medical Association［1918］551; MacMurchy, 1916a; MacMurchy, 1916b; Canadian Journal of Mental Hygiene［1919］1-3）、1918年から1922年まで全国7州で「精神薄弱」者の実態調査を実施した結果、移民のなかに軽度の「精神薄弱」者が多く含まれていることを指摘し、こうした移民の入国拒否が望ましいとしながらも、「『異常な人々の増加を防ぐための』一方策として断種がある」ことを示唆した（Christian［1973］7,9; Dowbiggin［1997］179; 細川［2009a］3; 細川［2010a］100; McLaren［1990］99）。

3）この理由について先行研究では、医師や科学者による優生学への抵抗のほかに（細川［2010b］223-225）、以下の要因が提示されている。第一に、オンタリオ州では西部2州よりも、断種に反対するカトリックの勢力が強かったこと（Dowbiggin［1997］187-188; 細川［2010b］222; McLaren［1986］144）。第二に、断種法制定強硬派の親ナチ的な主張が第二次世界大戦勃発とともに急激に支持を失ったこと（Dowbiggin［1997］187; 細川［2009a］8; 細川［2010b］222）。

4）マギーは、学校の学級編成および教育・訓練内容の適正化を図るために、学級ごとの対象児の生活年齢、精神年齢（M.A.）、I.Q.を定期的に検査すべきとしたが、これらM.A.やI.Q.を入級・進級の判定基準として採用することはなかった（McGhie & MacPhee［1929］20）。

5）オリリア施設入所者の障害程度別の割合は、記録のある1934年から1940年ではほぼ変化は見られない（Table 2）。

6）一般家庭のほか、1867年からトロントに設置されていた、刑務所出所女性の地域生活へ向けた中間施設（half-way house）も仮退所先となっていた（Simmons［1982］128; Archives of Ontario, RG29-24-1-8）。

文献

Archives of Ontario, Huronia Regional Centre（Orillia Asylum）, Series RG29-24-1-4, Annual Statistics 1876-1970.

Archives of Ontario, Huronia Regional Centre（Orillia Asylum）, Series RG29-24-1-8, Lorimer Lodge - Correspondence and Reports 1930-1938.

Archives of Ontario, Huronia Regional Centre（Orillia Asylum）, Series RG29-24-1-18, Sterilization 1933-

Table 2　入所者の障害の種類と程度

		「白痴」	「痴愚」	「魯鈍」	境界域	「精薄」以外	合計
1934年	人	378	981	380	43	23	1,805
10月末	%	21.0%	54.3%	21.1%	2.4%	1.2%	100%
1940年	人	440	1,012	489	48	10	1,999
3月末	%	22.0%	50.6%	24.5%	2.4%	1.2%	100%

出典：the Hospital Branch [1935] 70; the Hospital Branch [1941] 115.

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

1944.

Brown, W. H. (2005) *Making Representation: Dr. Helen MacMurchy and the "Feebleminded" in Ontario, 1906-1919*. Doctoral Thesis, University of Toronto.

Burnette, N. L. (1922) Mental Defect and Social Hygiene. *Canadian Public Health Journal*, 13, 69-75.

Canadian Journal of Mental Hygiene (1919) vol. 1.

Christian, T. J. (1973) *The Mentally Ill and Human Rights in Alberta: A Study of the Alberta Sexual Sterilization Act*. University of Alberta.

Chupik, J. & Wright, D. (2006) Treating the "Idiot" Child in Early 20th Century Ontario. *Disability and Society*, 21(1), 77-90.

Dodd, D. (1994) Helen MacMurchy: Popular Midwifery and Maternity Services for Canadian Pioneer Women. In D. Dodd & D. Gorham (Eds.), *Caring and Curing: Historical Perspectives on Women and Hearing in Canada*. University of Ottawa Press, 135-161.

Dowbiggin, I. R. (1997) *Keeping America sane: Psychiatry and Eugenics in the United States and Canada, 1880-1940*. Cornell University Press.

Enns, H. & Neufeldt, A. H. (Eds.) (2003) *In Pursuit of Equal Participation: Canada and Disability at Home and Abroad*. Captus Press.

Eugenics Society of Canada (1935) *The Aims and Objects of the Eugenics Society of Canada*. Eugenics Society of Canada.

Farrar, C. B. (1931) Editorials: Sterilization and Mental Hygiene. *Canadian Public Health Journal*, 22, 92-94.

Greenland, C. (1963) The Treatment of the Mentally Retarded in Ontario. *Canadian Psychiatric Association Journal*, 8(5), 328-336.

Hackett, G. T. (1969) *The History of Public Education for Mentally Retarded Children in the Province of Ontario, 1867-1964*. Dissertation, University of Toronto.

細川道久 (2008)「白人国家」カナダの構築—20世紀前半における精神衛生運動と移民．新川敏光(編)，多文化主義社会の福祉国家—カナダの実験．ミネルヴァ書房，166-186.

細川道久 (2009a) 20世紀前半のカナダ社会における優生学と白人性—「中間的存在」の管理のポリティクス．カナダ研究年報，29，1-16.

細川道久 (2009b) 19世紀～20世紀中葉のカナダにおける優生学の展開と医療専門職（Ⅰ）．鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集，70，79-100.

細川道久 (2010a) 19世紀～20世紀中葉のカナダにおける優生学の展開と医療専門職（Ⅱ）．鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集，71，89-104.

細川道久 (2010b) 19世紀～20世紀中葉のカナダにおける優生学の展開と医療専門職（Ⅲ）．鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集，72，211-235.

MacMurchy, H. (1916a) The Relation of Feeble-Mindedness to Other Social Problems. *Journal of Psycho-Asthenics*, 21, 58-63.

MacMurchy, H. (1916b) The Relation of Feeble-Mindedness to Other Social Problems. *Proceedings of the National Conference of Charities and Correction*, 43, 229-235.

MacMurchy, H. (1934a) *Sterilization? Birth Control?: A Book for Family Welfare and Safety*. MacMillan.

MacMurchy, H. (1934b) Report of the Departmental Committee on Sterilization. *American Journal of Psychiatry*, 91, 464-467.

McGhie, B. T. (1937) Place of Mental Hygiene in a Provincial Health Program. *American Journal of Public Health*, 27, 609-614.

McGhie, B. T. (1939) A Public Health Approach to the Problem of Conclusive Disorders. *Journal of Psycho-Asthenics*, 95, 1077-1082.

McGhie, B. T. (1941) Psychological Medicine in Modern Practice. *Canadian Medical Association Journal*, 27, 212-216.

McGhie, B. T. & MacPhee, E. D. (1929) *Training and Research in a Hospital for Subnormals*. Ontario Hospital Publications.

McGhie, B. T. & Brink, G. C. (1934) A Tuberculosis Survey in Mental Hospitals. *Journal of Psycho-Asthenics*, 90, 975-985.

McLaren, A. (1986) The Creation of a Heaven for "Human Thoroughbreds": The Sterilization of the Feeble-Minded and the Mentally Ill in British Columbia, *Canadian Historical Review*, 67(2), 127-150.

McLaren, A. (1990) *Our Own Master Race: Eugenics in Canada, 1885-1945*. Oxford University Press.

McLaren, A. & McLaren, A. T. (1997) *The Bedroom and the State: The Changing Practice and Politics of Contraception and Abortion in Canada, 1880-1997,*

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

Second Edition. Oxford University Press.

中村満紀男（2001）社会不適の典型としての「精神薄弱」と新興諸科学の役割—20世紀初頭アメリカ合衆国の優生学運動との関連．心身障害学研究，25，49-65.

Richardson, T. R.（1989）The Century of the Child: The Mental Hygiene Movement and Social Policy in the United States and Canada. State University of New York Press.

Shea, J.（1970）*A Century of Caring: History of the Ontario Hospital School, Orillia*. n.p.

Shea, J.（n.d.）*History of the Ontario Hospital School*, n.p.

Simmons, H. G.（1982）*From Asylum to Welfare*. National Institute on Mental Retardation.

Stephen, J. A.（1995）*Mental Hygiene, Mental Defect and Mental Age: The "Feebleminded Women" and the Work of the Toronto Psychiatric Clinic*. Dissertation, University of Toronto.

The Canadian Medical Association（1918）Canadian National Committee for Mental Hygiene. *Canadian Medical Association Journal*, 8(6), 551-554.

The Feeble-Minded in Ontario（1917）11th Report.

The Hospital Branch, Department of Health（1932）*Annual Report of, upon the Ontario Hospitals for the Mentally Ill, Mentally Subnormal, and Epileptic of the Province of Ontario*, 64th.

The Hospital Branch, Department of Health（1935）*Annual Report of, upon the Ontario Hospitals for the Mentally Ill, Mentally Subnormal, and Epileptic of the Province of Ontario*, 67th.

The Hospital Branch, Department of Health（1941）*Annual Report of, upon the Ontario Hospitals for the Mentally Ill, Mentally Subnormal, and Epileptic of the Province of Ontario*, 73rd.

The Inspector of Prisons and Public Charities（1929）*Annual Report of, Upon the Hospitals for the Insane, Feeble-Minded and Epileptic of the Province of Ontario*, 61st.

The Inspector of Prisons and Public Charities（1931）*Annual Report of, Upon the Hospitals for the Insane, Feeble-Minded and Epileptic of the Province of Ontario*, 63rd.

—— 2013.8.12 受稿、2013.11.19 受理 ——

NII-Electronic Library Service

Association of Disability Sciences, Japan

J. J. Disa. Sci. 38, 33－44, 2014

A Historical Study on the Conception and Measure of Community Living of the "Feeble-minded": Focusing on the Ontario Hospital for "Feeble-minded" at Orillia from the End of 1920s to the 1930s Canada

Yuri GESHI

The purpose of this study is to investigate the conception and measure of community living of the "feeble-minded" in the Ontario Hospital for "Feeble-minded" at Orillia from the 1920s to the 1930s. At that time the Canadian National Committee for Mental Hygiene and the Eugenics Society of Canada suggested sterilization as a measure to prevent the number of people with "mental deficiency" from increasing and actively campaigned to persuade the government of Ontario to pass the Sterilization Act. Around the same time, anti-sterilization views were being aired in the Canadian Public Health Association. In addition, B. T. McGhie, the Superintendent of the Ontario Hospital for "Feeble-minded" at Orillia, disapproved the implementation of sterilization. Instead of social segregation and institutionalization, he insisted the importance of societal assistance for "feeble-minded" people and pointed out the possible economic gains if they admitted to various institutions were to be able to live normal lives in their communities. He and S. J. W. Horne, his successor as the Superintendent, also initiated the following measures in his institution: implementation of an educational program to provide training to help "feeble-minded" inpatients live normal lives in their communities, adoption of a probation system, and establishment of colony houses.

Key words: Canada, the Ontario Hospital for "Feeble-minded" at Orillia, "feeble-minded", community, eugenics

Higashi Nippon International University

NII-Electronic Library Service